

第2回「日本ラテンアメリカ学会優秀論文賞」受賞論文講評

藤井健太朗「ラテンアメリカの「バロック」——カルロス・フエンテス『アウラ』における実践——」『ラテンアメリカ研究年報』41: 123-161, 2021年

本論文は、バロック性をめぐるラテンアメリカの作家の言説の概観、キューバの作家カルペンティエルのバロック論に関する考察、バロックに関するメキシコの作家フエンテスの言説の分析、彼の代表作のひとつである中編小説『アウラ』とバロック性の関係の検証によって構成されている。全体として、フエンテスのバロック概念の特徴を明らかにする前半部と、その特徴が『アウラ』にいかなる形で表れているかを具体的に検討する後半部とに大別できる。

前半部で藤井氏は、西欧においてかつて否定的に捉えられていたバロックが19世紀末から20世紀前半にかけて再評価されてきたこと、その流れに棹さしつつラテンアメリカの作家たちが新大陸の文化に、西欧文化に対する独自性としてのバロック性を見出してきたことを指摘し、その中でも重要なものとしてカルペンティエルの唱える論の考察を行う。カルペンティエルによれば、バロック性とは異種混淆性であるがゆえにラテンアメリカに特権的なものである。彼はそれをラテンアメリカの西欧文化からの「逸脱」を肯定的に評価する概念とし、先住民文化のバロック性を主張することで西欧文化を相対化すると同時に、バロックの起源とその西欧文化に属するとされているオリジナリティ（原初性）を転覆する。このキューバの先行作家の影響を受けているフエンテスの見方は、異種混淆性、ラテンアメリカの優越性、原初的なものと異種混淆的なものとの価値転倒、オリジナリティの価値の転覆の称揚といった点でカルペンティエルと共通するが、ラテンアメリカ文化の両義性とその起源の曖昧さを強調するところに特徴がある。フエンテスにとってバロック性とは、両義的な位置にあるラテンアメリカ文化の不確かなアイデンティティを、異種交配性によってありのままに表現するものであり、起源を無化し原初性を転覆するものである。

このような考察を行った上で、後半部では、フエンテス自身が『アウラ』の成立過程を明かしているエッセイ「私はいかにしてある本を書いたか」を傍証として参照しつつ、間テクスト性といった概念も援用しながら、『アウラ』にバロック性がどのように表現されているかを具体的に論じている。

このように本論文は、カルペンティエルの影響が指摘されながらも正面から論じられる機会の少なかったフエンテスのバロック論を中心に据え、適切な資料や先行研究を参照しながら、それが『アウラ』にどのような形で表現されているかを論証し、仮説の検証を行っている。後半部で『アウラ』を採り上げる必然性に関しより説得力のある説明がほしかったとの感はあるが、論旨は明瞭で、論の展開に破綻のない好論文である。今後、氏が考察したラテンアメリカのバロック性が、『アウラ』以外のフエンテス作品や他のラテンアメリカの作家の作品にどのように表現されているかを検証することを期待したい。以上をもって、審査員一同は本論文が第2回優秀論文に値すると結論した。